

研究・調査報告書

報告書番号	担当
5	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)	
Hostility, drinking pattern and mortality 敵意と飲酒パターンと死亡率の関連について	
執筆者	
Stephen H.Boyle, Laust Mortensen, Morten Gronbak and John C.Barefoot	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction 103,54-59,2007	
キーワード	
要 旨	
<p>(目的)</p> <p>敵意は様々な機序により健康に有害な影響を及ぼすと考えられる。過剰飲酒は敵意と健康寿命の短縮の関連を媒介する健康に有害な行動の一つである可能性がある。この研究では敵意と飲酒パターンとの関連を検討しさらに、この関連が敵意と死亡率の関連に影響を与えているかについて検討した。</p> <p>(方法)</p> <p>米国の Vietnam Experience Study コホートで生死を追跡されている飲酒者 3326 人を対象とした。敵意は Cook-Medley Hostility Scale(ACM)の簡略版により調査した。飲酒に関する指標はここ 1 ヶ月の一月の飲酒量、頻度、飲酒日の飲酒量と 5 杯以上の多量飲酒の有無について調査した。</p> <p>(結果)</p> <p>回帰解析により ACM と一ヶ月の総飲酒量($P<0.0001$)、一日の飲酒量($P<0.0001$)、多量飲酒($P<0.0001$)は関連を認めたが、ACM と飲酒頻度は関連がなかった。敵意と一日の飲酒量、多量飲酒の有無と一ヶ月の総飲酒量は総死亡と関連を示した($P<0.0001$)。さらに、飲酒様式、特に一日の飲酒量は敵意と死亡率の関連に影響を及ぼす可能性が示唆された。</p> <p>(結論)</p> <p>敵意は死亡率の増加と関連を認めた。そして敵意は多量飲酒のような長期的に健康に有害な飲酒パターンとも関連を認めた。このような飲酒様式は敵意と健康障害との関連を説明しうる。</p>	